●冷戦・ソ連・社会主義

1968年8月、プラハ　市内に侵攻したソ連軍と戦車を取り囲む市民。写真　AFP＝時事

半世紀近く続いた「冷戦」の時代には、アメリカ合衆国とソ連が世界の二大陣営を代表する二つの「超大国」とみなされ、日本を含む諸国の中にもそうした対抗関係が投影されていた。もっとも、だからといって、世界全体にせよ日本にせよ、「アメリカ派」と「ソ連派」に単純に二分されたというわけではない。両陣営のどちらかに帰属させられるのを拒み、そうした対抗図式そのものを超えようとする人たちもいたし、また「ソ連陣営」は、その外観的な「一枚岩」のイメージにもかかわらず、実際には決して一枚岩ではなかった。

こうした複雑さを確認することは、その時代を歴史として振り返る上で不可欠なはずだが、なぜかあまり指摘されることがない。「近い過去」という時代は、今日のわれわれにあまりにも近いものであるがゆえに、かえって忘れ去りたいとか、一面的に図式化した形で捉えて安心したいという欲求が作用するせいだろうか。

●「ソ連」と社会主義の実験

地上最初の社会主義国＝「ソ連」という国の登場が世界中に大きな影響を及ぼしたことは、その影響を今日どのように評価するかは別として、一つの歴史的事実である。特に一九三〇年代の世界大不況は、欧米諸国でも市場メカニズムへの信頼を動揺させたし、第二次世界大戦が「ファシズムvs民主主義」という対抗図式で戦われる中で、ソ連は「民主主義」陣営の一翼と位置づけられ、ナチ・ドイツとの死闘に勝ち抜いた。こうして、戦後初期くらいまでの時期には、ソ連および社会主義の知的威信がかなり高まった。

もっとも、ソ連の「社会主義的工業化」は、あまりにも大きな犠牲を伴うものだったし、その「成果」の度合いはしばしば誇張されていた。だが、それでも、当時の時代状況の中では、その衝撃を何らかの形で受けとめなくてはならないという意識は、社会主義への賛否に関わりなく共通のものだった。ヨーロッパに代わって戦後世界の一方の旗頭となったアメリカがソ連との対抗を強烈に意識したのも当然である。一九五七年にソ連が世界最初の人工衛星を打ち上げたことは、アメリカに「真珠湾以上の衝撃」といわれる「スプートニク・ショック」をもたらした（古矢旬「アメリカニズム」）。

●スターリン批判から「プラハの春」へ

他方、ソ連の中では、強烈な独裁者スターリンが一九五三年に世を去った後、その残した社会の様々なひずみからの脱却を求める動きが、徐々に始まった。フルシチョフによるスターリン批判は、それ自体としては中途半端なものだったが、それを超えたよりラディカルな改革を求めるうねりが生まれる契機となった。東欧諸国ではソ連以上に活発な改革論議が展開され、部分的には実行に移されようとした。また、中ソ論争を契機として、世界各国の共産党はソ連派・中国派・自主独立派などと分かれ、国際共産主義運動の多元化が明白になった。そうした中で、西欧諸国や日本でも、マルクス主義・社会主義をソ連の正統教義にとらわれることなく、種々の新しい観点から検討し直そうとする動きが広がった。一九五〇年代後半から七〇年代くらいまでの時期の西欧・日本に見られた社会主義の影響は、こういうわけで、単純にソ連体制の美化とか模倣とかに尽きるものではなく、もっと幅広い性格をもっていた。

いいかえるなら、当時の「左翼」知識人のかなりの部分にとって、ソ連は「模倣されるべきモデル」というよりも、むしろ「反面教師」――社会主義建設の失敗例――としての意味をもち、そうしたものとして関心の対象となっていた。ヒューマニズム理念からの逸脱、自由の抑圧、「近代を超える」志向（ある意味では「ポストモダン」的発想）が現実にはむしろ「ブルジョア的近代」への追随――それも下手な追随――となったことなどが次第に広く認識されるようになったからである。

もちろん、ソ連および「現存する（今から振り返っていえば、現存した）社会主義」への批判的態度は一挙に広まったというわけではなく、いくつかのステップを踏んで徐々に浸透した。最初の大きなきっかけは、一九五六年のフルシチョフによるスターリン批判（第二十回共産党大会での「秘密報告」）および同年のハンガリー事件であり、この両事件は日本を含めて世界中に大きな衝撃を与えた。一九六〇年代のソ連言論界はスターリン批判の影響で相対的な自由と活性化を経験したが、その中で、スターリン時代の様々な蛮行が広く知れ渡るようになり、また各種の改革論が広まった。六八年にチェコスロヴァキアで繰り広げられた広範な改革運動（その主要スローガンは「人間の顔をした社会主義」というものだった）は多くの人の共感を集めたが、それだけに、それが軍事的に圧殺されたことに伴う落胆と幻滅も大きかった。

●アフガン侵攻とポーランドの「連帯」

こうして一九七〇年代以降、社会主義の知的威信は世界的に低落した。七九年に始まるソ連のアフガニスタン侵攻はそれに拍車をかけた。八〇―八一年のポーランドで大衆的に展開した自主労働組合「連帯」の運動は、六八年のチェコスロヴァキアに比べて社会主義離れがより顕著だった（もはや、「人間の顔をした社会主義」というスローガンが掲げられることもなかった）。その「連帯」運動も戒厳令によって後退を余儀なくされた後、社会主義イデオロギーへのシニカルな態度がさらに広まった。ブレジネフ期のソ連ではイデオロギーの儀礼化・空洞化が進み、統治エリートの間でさえも、信念の欠如

1989年11月9日、ベルリンの壁崩壊　写真　Bilderberg／PPS

ソ連のアフガニスタン侵攻　1980年撮影。79年に始まったアフガン侵攻は、88年の撤退まで、10年の長きにわたった。

写真　AP／WWP

©Keler Alain／Corbis Sygma／Corbis Japan

「連帯」のワレサ議長（1980年8月）

が広範な現象となった。こうした状態は、八〇年代末の体制転換が意外なほどあっけなく進み、旧体制エリートの多くもそれほど必死に体制護持を試みようとしなかったことの背景をなす。

もっとも、社会主義の受容が外発的で皮相なものにとどまっていた東欧諸国の体制転換が極めて短時間に急速に進んだのに比べ、社会主義化過程が内発的だったソ連およびユーゴスラヴィアでは体制の定着度がより深く、それだけに転換過程も屈折した形をとったが、それにしても、イデオロギーへの確信は既に掘り崩されていた。

●ソ連解体と脱社会主義

ソ連・東欧におけるこのような経過は、それを観察する外部の人たちの間にも、次第に幻滅感を広めていた。一九三〇年代が世界的に「市場から計画へ」という思潮で特徴づけられたとするなら、八〇年代の流れは逆に「計画から市場へ」となった。そのような長期的流れの中で、ソ連・東欧圏の解体はいわば「だめ押し」ともいうべきものだった。このように考えるなら、ソ連解体が衝撃だったのは、ソ連体制の矛盾が明らかになったからではない。そんなことはとうの昔に常識化していた。それよりもむしろ、旧体制が揺らぎだしたとき、各種の社会主義改革論が勝利するのではなく、それらを押し流すような形で脱社会主義が一挙に進行したことこそが、最も大きな衝撃だった。社会主義圏の崩壊が日本の言論界・イデオロギー界・政界に及ぼした影響が単に「親ソ派」の敗北というにとどまらない広がりをもったことも、そうした事情と関係している。

このことは冷戦の終わり方とも関係する。ゴルバチョフによるペレストロイカの前半（一九八九年のマルタ会談まで）には「和解」としての冷戦終焉が期待されたが、その後、急速に「ソ連側の一方的敗退」という様相が濃くなった。冷戦終焉が「和解」ではなく、「一方的勝利／敗退」であるなら、「勝者ナンバー・ワン」たるアメリカは自信を深め、冷戦期と同様のメシア的「世界の警察官」意識をますます増幅させることができる。今日われわれの眼前で展開しているのは、まさにそのような現実である。

（塩川伸明）

▲▼**市場経済の中のロシア**　老朽建造物を覆い隠す広告（サンクトペテルブルク）と厳冬の中のホームレス（モスクワ）。

© Antoine Gyori／Corbis／Corbis Japan